

第二章 TOEICが始まる

H7 — 初めてのTOEIC

次の休日の午後、オレは、ターミナル駅近くにあるオフィスビルの一室を訪れることになった。エレベーターでフロアを移動すると、陽当たりの良いガラス張りの廊下に机と椅子が一脚ずつ置かれ、スーツを着た50代の男性が「こんにちは」と、オレに会釈した。受付らしいその場所でオレが「叶英人です」と名乗ると、スーツの男性は紙に印刷されているオレの名前に蛍光ペンで印をつけ、「席は自由ですので、好きなところに、おかけください」と、室内へ促した。

そこは、ビジネス・セミナーなどで使われそうな、白を基調とした清潔感のある会議室で、ふたりがけの長机が横に3列、縦に10列並んでいる。室内には、すでに何人か先客がいた。知っている人はいなかったが、目が合った何人かと、なんとなく互いに黙礼を交わす。

それから数分が経ち、指定された時刻までに、会議室の席は半分くらい埋まった。性別は男女半々くらい。10代に見える若い子たちから60代以上らしき年配者たちまで、世代もバラバラだ。

受付で見た名簿にはオンライン英語塾O E Jのロゴが記されていたので、ほかの人たちも、みんなO E J経由で集められたのだろうか。だとすれば、O E Jのビジネスは幅広い顧客層に浸透しているように思える。

ホワイト・ボードには「TOEIC L & R IPテスト」という貼り紙が見える。そう、オレが今から受験するのは、TOEIC——オレにとっては、人生で初めて体験するTOEICだ。

先日、O E Jに2回目にアクセスした時、エリカはオレに説明してくれた。O E Jは、先生から与えられる課題をクリアできれば、無料で受講し続けることが可能になる。課題クリアに失敗した際にはそのつど料金が発生するが、課題をクリアできた時には無料というスタンスは、ずっと変わらないらしい。世の中、なにも苦勞せずに無料なんて話は詐欺師の誘い文句にしかありえないので、課題をクリアすれば無料という話には納得し、安心もした。詐欺ではなく、まっとうな組織という印象が強まったからだ。

「無料がかかっているからには、毎回けっこう難しい課題なんだよな？」

オレが問い返した時、エリカは少し困った表情で笑った。

「なにを難しいと感じるかは人それぞれですので、絶対的なことは申せません。ですが、ワタクシどもは、決して無理な課題はご提案いたしません。OEJでは、受講者の方に、まずはTOEICを受けていただいています。ヒデ様は、これまでTOEICを受験されたことはありませんか？」

英語資格試験TOEICの名前は、オレが日常的に見るネットニュースでもたまに話題に出るので、もちろん存在は知っている。ただ、世代的に、オレの学生時代には、英検はよく耳にしたが、TOEICについて聞く機会はほとんどなかった。たしかオレが30代なかばだった2010年頃から、有名企業が相次いでTOEICスコアを人事考課の対象にすると報じられ、大きな話題になっていたように思う。その後、TOEICは社会に普及して、今では大学や高校の入学資格として認められたり、単位に置き換えられたりしている、という話を聞いたこともある。実は、オレの会社でもTOEIC900点を獲れたら特別ボーナスが支給される制度があるそうだが、達成した人の話は聞いたことがない。オレは英語というだけで拒否反応を示してしまう「英語アレルギー」なので、わざわざ受験料を払ってまで受けようと思ったことは1度もない。ん、待てよ……もしTOEICを受ける必要があるなら、受験料は当然、必要になるから、その時点でOEJは無料とは言え

ないんじゃないのか。

受験料のことについて考えた時、質問する前にエリカがそれに触れた。

「初回のTOEIC受験料はワタクシどもOEJが負担しますので、無料でご受験いただけます。しかも！OEJで申し込んでいただければ、2回目以降の受験も、ベストスコアを更新できれば、毎回無料になるんですよ！」

なにしろ1度も受験したことないので、ベストスコアを更新するのがどれだけ大変かはわからないが、とりあえず初回は無料で受験できるのなら、オレにとっては、なんのリスクもない。それなら、とりあえず受けてみてもいいかな、と思ってしまった。これって、OEJに、うまく乗せられているのか？

今までよく知らなかったが、このOEJという企業は、オレが思っていた以上に、仕組みのしっかりした、規模の大きな組織なのかもしれない――。

「こんど、TOEICを受けてみようと思うの」

夕食の席でそう切り出すと、食事しながらテレビのニュースを観ていた夫は、「TOEIC?」と、げんなり顔で箸を止め、わたしの顔を見ました。

「この前、英語学習の話はしていたけれど……いきなりTOEICを?」

夫が驚くのも当然です。わたし自身、この展開には驚いているんです。

「インターネットで見つけたオンライン英語塾OJのサービスで、TOEICを初回は無料で受けられるそうなの。その後も、もしベストスコアを更新できれば、無料なんですって」

わたしの説明を聞きながら夫は首を傾げ、マユをひそめました。

「まあ、無料なら1度受けてもソンはないかもしれないが……希美子、TOEICは難しい試験だよ。そう簡単にベストスコアを更新できないだろう」

「あなたは、会社から言われて受けたことあったのよね?」

「学生時代は、英語は得意科目だったからね。900点を獲ったら会社が特別ボーナスを

出してくれるから何度か挑戦したんだが、私のベストスコアは780点止まりだったよ。残念ながら、800点にも至らなかった」

「780点だなんて、すごいじゃない！」

わたしはTOEICが何点満点なのかさえ知らないのですが、テストといえば、ふつう100点満点なので、780点でも、すごいと思えました。わたしにホメられて満更でもない様子で、夫は一転、照れた表情を浮かべました。

「一希も今後、大学でTOEICを受験することになるんじゃないかな。希美子も英語を始めて、親子でTOEICというのも、いいんじゃないか」

夫の了解が得られて安堵するのと裏腹に、OEJの詳細をあえて話していない後ろめたさもありました。英語学習だけなら聞こえは良いですが、ケンエイくんのような30歳くらい若いイケメンから英語を習おうとしていることを知ったら、夫はどう思うでしょうか。

今後どう夫に説明すべきか、という不安はありますが、それ以上に期待も大きいのは、ケンエイくんのおかげです。

数日前のOEJでの授業の一場面が、記憶によみがえります。

「学生時代からまったく英語を勉強していないのに、TOEICなんて、受けられるのかしら……英単語の綴りとか、思い出せる気がしないわ……」

わたしがそう語った時、ケンエイくんは爽やかに笑い飛ばしてくれました。

「なに言ってるんだよ、希美子。テストを受けるだけなら、だれでもできる。OEJで申し込めばタダなんだし。TOEICはマークシートの試験だから、クイズだと思えばいい。

希美子は何点くらい獲るのか、オレ、マジで興味あるよ」

ケンエイくんからそう言われると、なんだかヤル気が湧いてきました。

「わたし、TOEICは1度も受けたことがないんだけど、高校生の時は、実は、英検の……たしか、準2級——は合格したおぼえがあるのよね」

「へえ。なんだ、希美子。前に、成績は中の上だと言ってたけど、実は、けっこう英語やっていた人？」

「嫌いではなかったかな。でも、学生時代の話だから」

数十年前の話——とは、あえて言わないでおきました。

「希美子の初受験スコア、超楽しみ。早く結果が知りたいな！」

ケンエイくんからそう言ってもらえたので、TOEIC初受験への意欲が湧いてきました。夫の了解も得られましたので、あとは受験するのみです。

H8

リスニングの衝撃

アナウンスが流れて、試験が始まった。冒頭からいきなり外国人が英語で話し始めて、オレは、あたまを抱えた。なにを言っているのかまったく理解できないが、ナレーターが「パートワン」と言ったのは聴き取れた。「パートワン」は日本語としても使われる言葉だから、聴き取れない人は、いないだろう。

今から解答用紙のパート1のマークシートを塗ればいいのか？ 問題用紙の最初のページにモノクロの写真があり、その写真について説明するA B C Dの4択が英語で順番に読み上げられているらしいことは、かろうじて理解できた。正しい写真の描写を選べ、ということのようだが、英文が読まれるスピードが速すぎて、さっぱりわからなかった。わからないものは仕方ないので、解答用紙の1番の欄は適当にCとマークした。すると、その後、ナレーターがなにかを英語で話し、また「パートワン」と言った。

ちょっと待ってくれ。今からパート1が始まるなら、さっきのは……？

そこでオレはハタと気づいた。先ほど読み上げられた最初のページの問いは練習問題で、今から始まるのがパート1の問題なのだ。先ほどマークしてしまった1番のCを消しゴム

で慌てて消し始めた時にも容赦なく英語のナレーションは続き、1番の質問は終わって、すでに2番が読み上げられ始めているので、結局、消しかけた1番を仕方なくCのまま塗り直して、2番は適当にBに塗った。もちろん、質問の意味など理解しておらず、ただの勘である。

3番の質問でようやく、初めて身構えて聴くことができたが、たとえ聴くモードになっても、わからないものは、わからない。パート1の6問はすべて写真を描写する問題で、A B C Dの4択から写真を正しく描写しているものを選べば良いらしい、と途中で理解できても、そもそも英語が聴き取れないのだから、正解を選びようがない。もちろん、マークシートの4択だから、たとえ勘で答えても正解確率25%というのは、クイズのようで魅力的だ。TOEICは、ぜんぶで200問もあるようだが、勘が冴え渡れば、いきなり高得点なんてことも、あるんじゃないだろうか。

やっとパート1に慣れ始めてきたかな、と感じ始めた段階で、「パートツー」とナレーターが言ったのを聴き取れた。パートが終わることに休憩させてほしいのだが……休みなしというのは、消耗するな。昔、だれかが「TOEICは疲れる。しんどいテストだ」と語っていたのを、急に思い出した。

説明らしきナレーションが流れ、問題の通し番号7番から、パート2が始まった。この

パートは、質問文が流れ、それについての正しい返答を選ぶ仕組みらしい。解答用紙全体を見渡すと、TOEICテストの全7パートのうち、このパート2の25問だけがABCの3択で、ほかの6パートは、すべてABCDの4択なので、パート2だけ異色という感じがする。

例によつて、ほとんど聴き取れないのだが、パート2の質問には、過去に字幕で観た洋画とか海外ドラマで聴いた英語の有名なフレーズがいくつかあり、英語力ゼロのオレでさえ聴き取れて、「お、これならわかるかも?」と感ずることが何度かあった。と言つても、自信満々で解答できた問題などないに等しい。

パート3の39問とパート4の30問は、英語初心者のおレには、なにひとつ理解できない、拷問のような苦行の時間だった。パート3では、ふたり、あるいは3人が英語で話すだけあいが、パート4では、ひとりの人が延々と英語を話し続ける長文がものすごいスピードで流れ、それぞれの状況につき3問ずつ出題された。しかも、パート3とパート4のラスト数問では、問題用紙に印刷されているシンプルな地図や表などのビジュアル情報を見ながら答えないといけなかった。これらの問題を、もし真剣に正解するつもりで解くのなら、おそらく極度に消耗するだろう。だけど、オレには、そもそも問題文が意味不明で理解できないので、適当に勘で解くことしかできない。ある意味、気楽なものだった。

そうしてリスニング・パート100問を終えた時点で、試験開始から40数分が経過していた。オレの人生で、40分以上も英語漬けになるのは、間違いなく、これが初めてだ。だが、このあと、さらに75分もリーディング・パート100問を解かないといけない……。TOEICテストのゴールは、気の遠くなるくらい、はるか先に思えて、絶望する。これはたしかに「疲れる」し、「しんどい」。たとえ無料だとしても逃げ出したくなるほどだから、わざわざお金を払ってこのテストを受ける人たちはすごい——と、素直に尊敬したくなった。

K8

膨大なリーディング

初めて受けるTOEICテストは、とまどいばかりでしたが、その中には、良いとまどいもありました。まったく手も足も出ないことを予想していたのですが、リスニング・パートでは、意外に英語を聴き取れたのです。もちろん、30年以上も英語学習から離れていたのですから、すべてをハッキリ聴き取るのは無理ですが、漠然と、なんとなく意味がわ

かる気がしたのです。

リスニング・パートの40数分は、そんな意外な驚きを味わっているうちに、あつという間に過ぎ去りました。けっこうできたんじゃない？ という手応えがあり、良い流れでリーディング・パートに入れました。

ところが、リーディング・パートに入った途端、わたしの油断と慢心は見事に打ち砕かれました。

TOEICテストのパート5は文法問題が延々と30問（リスニング100問の続きなので、問題番号101番から130番）が並んでいて、英文の中の空欄に入る適切な単語をABCDの4択から選ぶ形式でした。英文の意味をなんとなく理解できたような気がする問題も、どの選択肢が正解かわからず、どれも正解に思えてしまって、わたしは途方にくれました。もちろん、知らない単語が含まれている問題はわからなくて当然ですが、すべて知っている単語のはずなのに、正解がまったくわからないのです。こんなの、ほんとに正解をひとつに絞れるの!? と、テストの信憑性しんぴょうせいを疑ってしまったほどです。

自信をもって答えられる問題はほとんどなく、結局、勘に頼って答えてばかりなので、どのくらい正解できたのか、まったく自信はありません。

パート6は、パート5より長い、手紙やメールの文面などの長文が4セット並んでいて、

それぞれの長文セットの中に4つずつ空欄がありました。通し番号では、131番から146番の16問がパート6となります。各長文セット4問のうち3問は、パート5と同じく空欄に入る適切な単語を選ぶ問題ですが、毎回1問は空欄に入る英文を選ぶ問題でした。それぞれの英文をきちんと理解できていないので、どれが適切かを考えるのにずいぶん時間がかかり、しかも、正しい答えを選べた自信も、ありませんでした。

TOEICテストのリーディング・パートは75分とのことですが、パート5とパート6を必死で解いていたら、いつの間にか50分近く経過していました。パート7は54問もあるのですが、すべて長文読解問題です。問題用紙をパラパラめくっていると、パート7には絵や図、広告、スマホのチャットのようなビジュアルも挿入されていて、文字だけのパートより解いていて楽しくなりそうですが、英文の量が膨大で、残り20数分で54問も解くのは、どう考えても不可能です。パート7をすべて熟読して解き終えるには、それだけで75分以上かかるような気がします。わからない単語がたくさんあるパート7を必死で解きましたが、予想した通り半分も解くことができず、残り時間が数分になったところで、わたしは仕方なく残り数十問を、すべて適当にマークしました。TOEICテストはパート2だけが3択で、ほかはすべて4択です。たとえすべて勘で答えても正答率25%以上（パート2は33%以上）というのは、希望が持てました。だいたい理解できていれば、けっこう

正解できるのではないでしょうか。

そうして、わたしのTOEICテスト初受験は終了しました。

H9

授業時間を延長すべきなのか

3回目にアクセスするオンライン英語塾OEJは、オレがTOEICテストを初受験した当日の夜に予約を入れてあった。正直、試験には手も足も出なかったが、その困惑をエリカに語るのは、なんだか楽しかった。社会人として歳を重ねるにつれて、自分のできることとできないことを自然に線引きして、できないことにチャレンジする機会が激減していたような気がする。今回のTOEICのように、自分がまったく歯が立たないことに捨て身で挑戦したのは、前回は、いつだったか……と考えても、思い出せないほど昔だ。たとえ完敗しても、なにかに挑戦するというのは、それなりの達成感が伴うようだ。

エリカはオレの体験談を、時に笑顔で、時に真剣な表情で、何度もうなずきながら聞いてくれた。興奮ぎみに話していると、15分は、あつという間だった。

「ビデ様のお話、もっと聴きたいです。延長なさいますか？」

悪魔の誘惑のように甘美な囁きだ。そこで、オレは、ふと疑問に思った。

「だけど、エリカ、次の時間帯も予約が入ってるんだろう？ たえオレが延長したくなつても、できないんじゃないのか」

「あー、ご主人様、さてはOEJの利用規約をちゃんと読んでいませんね？ OEJでは、前の時間帯の人が延長を希望した場合には、別の日時に変更されるのがルールなんですよ。ワタクシどもは、そのくらい延長を重視しているんです」

延長は必ず有料になるはずだから、ビジネスとしては当然だろう。オレのように無料で利用させてもらっている者は、文句を言える立場じゃない。

「そっか……。んー、でも、オレが延長したばかりに、次の人の授業を延期してもらうのは、悪い気がする。今回も、延長は、やめておく」

本心としては、まだ延長に踏み切れるほど、OEJを信頼して、のめり込んではいないのかもしれない。だいぶ気持ち傾いているのは事実だが。

「わかりました！ でも、ご利用者の皆様が同意してくださっているルールですから、今後もし延長しなくなったら、遠慮なさらないでくださいね」

3 回目の授業で、エリカがオレに与えた次回の課題——宿題——は、TOEIC テス

ト初受験の結果が届いてから予約し、結果を報告すること。それがクリアできれば次回も無料だが、違反した場合は課金されるという。

課題としては簡単すぎる気もしたが、自分の好きな先生と話すのをそれまでガマンできずに料金を支払う利用者もいるのかもしれない……。

K9 — 初めてのスコア

TOEICテスト初受験の直後にケンエイくんと話してから1週間ほどで、結果が送られてきました。オンライン英語塾O E J ではなく、TOEICテストを運営している国際ビジネスコミュニケーション協会から、スコアシートが送られてきたのです。そこには、わたしのスコアが記されていました。

リスニング 200

リーディング 155

トータル 355

スコアシートといっしょに同封されていた「スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表」によると、スコア220～465点の範囲内は、TOEICテストのランクでは下から2番目の「レベルD（通常会話で最低限のコミュニケーションができる）」であることがわかりました。

夫のベストスコア（780点）の半分以下だとはいえ、数十年ぶりの英語試験であることを考えると上出来だと思えました。それに、「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」レベルだと評価されたことが嬉しくて、夕食の席で思わず夫にスコアシートを見せてしまいました。

「先日、TOEICを受けてから、まだ1週間くらいじゃないか？ ふつう、公開テストのスコアは3週間後に発表されるはずだが……ああ、そうか。オンラインの英語教室のIP受験だと、結果がわかるのも早いのか」

「アイピー受験……って、なんなの？」

「TOEICテストのメインは、全国で同日に実施される公開テストなんだが、不定期で過去問を団体受験できるIPテストという制度があるんだよ。参加者が10名以上いれば実施できるので、英語教室などで広く採用されている。IPは過去問なので、公式なスコアとして認められない場合もある」

「そんな……過去問だと言っても、わたしは知らない問題なのよ」

「もちろん、過去に使用されたテストだから、テストとしての精度は変わらない。ただ、企業が昇進やボーナスの参考にする場合には、IPのスコアだと認められないケースもある、ということだよ。うちの会社は、公開テストのスコアじゃないとダメだと言われている。会社によつては、IPのスコアでも認められるところはあるかもしれない」

そんな話をしながら、夫は、わたしのスコアシートを見ていました。

「ほお……長らく英語を勉強していなかったのに355点というのは、なかなかのもんじゃないか。このスコアなら、勉強すれば、まだまだ伸びるかもな」

夫の言葉には、自分は倍以上のスコアを獲得しているという余裕と優越感が垣間見えて、わたしは少し悔しい気持ちになりました。同時に、スコアアップして、夫をもっと驚かせたい、という気持ちも初めて芽生えました。

「じゃあ、オンライン英語塾O E Jで勉強するのに、賛成してくれる？」

「ああ、もちろん。英語を勉強して、悪いことなんかないだろう。今度、そのO E Jとやらの授業風景を、1度、見物させてくれないか」

夫の言葉に、わたしは焦って、ごまかすように慌てて笑いました。

「やめてよ！ 必死で勉強しているところなんて、見せたくないわよ」

わたしがムキになって否定したので、夫も、おかしそうに笑いました。ケンエイくんとの時間を夫に見せるなんて、できるはずがありません。

Hi10

最低ランクからの出発

初受験したTOEICテストが、ぜんぜんできていないことは自覚していたのだが、送り返されてきたスコアは、オレの予想と期待を下回っていた。

「おいつ、ウソだろ……なんだよ、このスコア！」

リスニング 95

リーディング 75

トータル 170

TOEICテストは、990点が満点——最高点とされるらしい。マークシートの4択（パート2だけは3択）だから、適当に勘で塗っても25%以上、つまり、250点くらいは獲れると思っていた。時間が足りなくて、最後のほうは勘で塗るのも間に合わなかつ

たのだが、それにしても200点を割ってしまうというのは、正直、ショックだった。

スコアシートに同封されていた「スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表」によると、スコア215点以下は、TOEICテストでは最低ランクの「レベルE（コミュニケーションができるまでに至っていない）」だ。たしかに、オレは外国人を見れば逃げ出す英語アレルギーだから、コミュニケーションができるまでに至っていないと言われれば、その通りなのだが……。オレのことをご主人様として仕えてくれるエリカも、このスコアを見たら失望するだろう。なんて、不甲斐ない「ご主人様」だ。でも、報告しなければ、エリカと話すことはできない。ツラかったが、オレは4回目の授業を予約した。

画面に映ったエリカは、いつものように最初は満面の笑みを浮かべていたが、オレの表情が冴えないのに気づいて、心配そうにマユを寄せ、首を傾げた。

「ヒデ様、どうされたんですか……。お顔色が、よろしくありません」

オレは、スコアシートを画面のほうに向けて、説明に替えた。

数秒の間に続いて、エリカのやさしい声が、うつむくオレの耳に入った。

「ヒデ様、もしかして、マークシートを、ぜんぶ塗りませんでしたか？」

「えっ——!? エリカ、なんでわかるんだ!？」

驚いて、オレは顔を上げた。占い師を先生に選んだおぼえはないんだが。

「絶対とは申しませんが、すべてのマークシートを塗った場合には、たとえばすべての問題を勘で答えても250点以上になることが多いのです」

「おい、待ってくださいよ。オレの英語力って勘以下なのか？」

思わず苦笑してしまっただが、エリカは真剣な表情のままだった。

「いえ、そうではありません。TOEICテストはリーディングで読む英文が多いので、900点近くならないと、すべての問題を解き終えることは難しいのです。なので、ほとんどの受験者は、最後のほうは勘でマークして、その数十点が本来の実力に加算されるのです。それをしなかったヒデ様は、まじめで素敵ですし、とても男らしいと思います。さすが、ワタクシのご主人様です！」

笑顔で両手の拳を振ってはしゃぐエリカは、演技をしているようには見えない。まさか200点以下でホメられるとは、夢にも思わなかった。

「つてことは、ぜんぶ塗れば、こんなオレでも250点以上に——？」

「なります！　ちなみに、TOEIC受験者のあいだでは、時間がなくなつて勘でマークすることを『塗り絵』と呼びます。ヒデ様も、今後は、塗り絵を習慣づけて、忘れないようにしてくださいね」

今後は——という言葉は、今後の継続受験を予期させるものだが、それも悪くないかも

しない。オレは、そんなふうに思い始めている。

『塗り絵』で、まずは200点突破か——」

220点以上なら、最低ランクのレベルEは卒業できる。まずは、せめて、そのくらいは実現させたい。最低ランクというのは、いい気分じゃないから。

「ヒデ様、その意気です！ 次の受験が楽しみですね！」

エリカとのやりとりが、どんどん楽しくなってきた。

オレの人生で、こんなにもワクワクすることは、本当に久しぶりだ。

ブラック企業で日常を過ごしているからこそ、これは、やみつきになる。

オンライン英語塾O E Jとエリカは、オレの人生に現れた、大きな希望だ。

Chapter 2 Summary

本日もOEJをご利用いただき、ありがとうございました！

また、先日はTOEIC (L&Rテスト) の初受験、おつかれさまでした！

TOEICは、マークシートのための試験なので、クイズ感覚で受験でき、あなたの英語力を測定できます。ただし、すべての問題を時間内に解くことは難しいので、スコアが下がりすぎて自信喪失しないように、たとえ勘でも、すべてのマークを塗ったほうが良いでしょう。最後の数分はマークシートを塗るためだけに確保しておかれることを、オススメいたします。

これからもワタクシどもOEJといっしょに、楽しく英語学習しながら、あなたのTOEICスコアと英語力を、どんどん高め続けましょう！

オンライン英語塾 OEJより